事例 54　単元「財務諸表分析の実際」

高度な専門知識を身につけ、簿記のスペシャリストを目指そう

商業　簿記総合演習　商業科第３学年
石川県立小松商業高等学校・教諭

１　事例の概要

本校は、将来生徒が社会においてビジネスのスペシャリストとして活躍できるよう、必要な専門性を身につけるため、生徒育成の一環として簿記に関する高度な資格取得を奨励している。しかし、生徒は資格を取得することに精一杯であり、そこで得た知識を実用的な力に成熟させていない。そこで簿記実務能力の向上を目標に、１年次から３年次まで系統立てた新たな学習プログラムを作成することとした。このプログラムでは、１年次に簿記の基礎を学び、２年次の「会計」「原価計算」の学習により簿記の専門性を高め、３年次にその知識を活かしたより実学的な学習を行う。特に簿記を実務に生かす上で欠かせない「財務諸表分析」と「財務会計論」の学習はこのプログラムの根幹となる。「財務諸表分析」は、企業の財務諸表を分析し、自らの考えをまとめ意思決定を行うものであり、「財務会計論」の学習は、企業を取り巻く外部の利害関係者への会計情報の提供を目的とするものである。どちらの学習も、１・２年で学習してきた簿記分野の知識をすべて活用し、問題解決に当たる必要があり、実用的な力を育成することができる。

２　実践内容

(1)単元の目標

① 財務情報より各種指標を計算し、比率・比較分析を行い、会計数値の持つ意味を理解する。
② 分析された会計数値から企業評価を行い、企業状況を数理的に判断し理解する。
③ 企業分析・企業評価を踏まえ、今後のビジネス社会の動向を論理的に分析する能力を育成する。

(2)指導上の工夫点

① 一人ひとりが系統性を持ったプログラムを実施することにより確実な学力を身につける

本校では１年次後期から簿記の授業では習熟度別学習を実施している。これは、個々の学力や目標に応じた授業が展開でき、生徒の力を着実に伸ばしていくことに有効である。この習熟度別学習を効果的に活用し、１年次における基礎学習、２年次における応用的知識の修得を経て、３年次における財務諸表分析等の実学的な学習に結びつけていく。生徒は、系統性を持った学習と、個々の習熟度に対応したプログラムにより、確実な学力を身につけることができる。

② 財務諸表分析を通して企業評価行うことにより会計の正しい目を養う

現在のビジネス社会においては、新聞等に掲載される財務諸表から企業の状況を的確に読み取り、企業価値を適性に評価する能力が必要である。財務諸表を的確に分析するには、商業高校で学ぶ簿記やビジネス経済など各分野の知識をすべて駆使し、分析を行うことが必要となる。３年次の「簿記総合演習」における財務諸表分析の学習を通して、会計の正しい目を養わせる。

③ 「分かった」つもりから抜け出し、応用力を育成する

「分かった」と思う基準が個々人によって異なる。３年間を通じて簿記を学習し、資格を取得しても、知識を活用する能力が十分でないまま実社会に就く生徒が少なくない。これは、理解度の度合いの浅さに起因していると思われる。この部分を補うために、物事の具体的仕組みを一つ一つ整理し、深く考察することのできる力の育成を行う。

Ｂ－１　企業分析ワークシート　　Ｂ－２　企業評価ワークシート

３　指導の実際

学習内容	生徒の学習活動	教師の指導・留意点	評価基準【観点】（評価方法）
・財務分析	・企業の財務分析を学習する。	・各企業の財務諸表から収益性・安全性の分析を、ワークシートに記入させる。	・収益性・安全性の分析方法を理解している。 【知識・理解】（ワークシート）
・企業評価	・財務分析の指標から、各企業の経営状況をまとめる。	・分析結果を基に、比較分析を行い、良好な企業はどこか検討させる。 ・比較分析は、一定時点の分析であり、さらに趨勢的に会計数値を見る必要性を理解させる。	・財務情報より会計数値の意味を理解し、分析した会社の今後の動向を論理的に判断する。 【思考・判断】（観察）

Ｃ－１　指導案

４　成果と課題

(1)　成果

①理論と応用力の結合

これまでの簿記では、検定試験への対策学習に多くの時間が割かれるため、知識・理論の学習が多く、机上の学習的要素が強かった。検定試験の位置づけも資格取得を活かした進路開拓の意味あいが大きく、上級学校に進学しても知識を生かせる力がついかどうかは疑問であった。３年次に実学的な「簿記総合演習」の学習を行うことにより、理論と実際を結びつけることが可能となり、生徒が簿記の学習で修得した力を主体的に生かせるようになった。

②　個々の能力に応じた確かな学力の育成

１年次からの習熟度別学習は、確かな学力を身につけていくために大変効果的である。個人別の最終目標を的確に設定し、個々の能力に応じた学習を着実に積み重ねることにより、生徒一人ひとりにやる気と自信が生まれた。さらに、学習内容を１学年から３学年まで系統的に展開することにより、確かな学力を育成することができた。高校を卒業してから社会に巣立っていく生徒には自信が生まれ、「生きる力」の育成へと繋がっていった。

③　「会計活用能力」の育成

現在、世界経済の動向は今後どのようになっていくのか不透明な状況下にある。しかし、このような中で逞しく生きていくためには、この経済状況の情報を収集・分析し、いかに正しく判断するかという情報活用能力と意思決定能力が必要となる。「財務諸表分析」、「財務会計論」を学習することにより、経済の動向を企業の会計数値から読み取り、意思決定に活用することのできる人材育成が可能であることがわかった。

(2)　課題

「分かる」度合いを測る尺度

「分かったつもり」で高校を卒業するのと、役に立つ力をつけ「分かった」で卒業するのとでは、大きな差異がある。自らが、３年間専門的に学習してきた内容が「理解できた」と感じることができれば、「人に伝える」能力もそこで育まれていく。知識を増やしていく学習方法も大切であるが、得た知識をどのように応用するかを学ぶ学習方法が、今後より大切となる。しかし、「分かる」尺度は、個々の学習履歴や到達目標により異なり、「分かる」という事を計る到達基準が必要となる。商業教育においては検定試験学習偏重の弊害が叫ばれているが、平成２１年度に新しく実施される「会計実務検定試験」は、３年次の目標としている実務的な力を計る要素が多く含まれており、その有効な活用も今後の検討課題となっている。